

と見ざる可からず、但し通鑑の註者胡三省は其の貞觀四年二月の條に、李靖が「與李勣謀曰、頡利雖敗其衆猶盛、若走度磧北、保依九姓、道阻且遠、追之難及」とあるに注して、「新書回紇傳有九姓、曰藥羅葛、曰胡咄葛、曰囁羅勿、曰貊歌息訖、曰阿勿喃、曰葛薩、曰斛嗚素、曰藥勿葛、曰奚邪勿、此回紇後來彊盛所服九姓、是時所謂九姓、即謂拔野古・延陀・回紇之屬」と記せり、此の九姓を以て唐書に見ゆる回鶻の九姓と區別したるはもとより余輩の贊同する所なれども、其の中に延陀部を加へたるに至りては、別に確かなる史料の發見せられざる限り、承認する能はざる所なりとす。

以上述べたる所によりて、唐代單に九姓と稱するものは藥羅葛以下の九姓より成りし回鶻を指せるものに非ず、また九姓の稱を冠したる部屬は決して回鶻のみに非ることを明かにせり、<sup>補④</sup>從來學者の九姓なる語を解くもの、余輩の知れる限りに於ては回鶻を指せるものなりとするか、若くは回鶻・拔野古の何れかを指せるものなりとす、例へば Chavannes 氏の如きも實にその一人にして、其の唐故三十姓可汗貴女阿那氏の墓誌の解釋に於て、「君臨右地、九姓恐其神明」と記せるを解きて、九姓とは回鶻か拔野古かの何れかに外ならずといへり。<sup>⑤</sup>蓋し上述引例(一)に註記したるが如く、九姓拔野古(拔野古)の名は、兩唐書回鶻傳の記載する所なるを以てなり、然れども此の如きは冊府元龜の記事に通曉せる同氏の説明する所としては、妄斷に過ぎたるの話を免かるゝ能はざるべし。

翻りて舊唐書に「本九姓部落」、新唐書に「悉有九姓地」として挙げたる藥羅葛以下の九姓なるものに就きて考ふるに、新唐書が「與僕骨・渾・同羅・拔野古・思結・契苾六種相等夷」と記せるより見るも、其の鐵勒種中に數へらるべきものなることは論無けれど、然も此等の各部は唐代を通じて極めて微々たる小部落に過ぎざりしこと明